

(2) エリア②：文献上 En-a が厚く、崩壊規模・密度が高い

崩壊規模と平面形状	： 大規模、樹枝状の土砂流出
崩壊上端の位置	： 谷頭付近の上部遷急線以下の斜面のほぼすべて
崩壊の縦横断形状	： 等斉直線斜面、凹形谷型斜面
崩壊したテフラ層	： En-a 0.5～1.0m、一部Spfl
テフラの厚さ	： 0.5～2.5m
斜面傾斜	： 20～30°
崩壊面の地質	： 新第三紀シルト～砂岩
溪床状況	： 大量の土砂や流木が二次谷～三次谷を埋積
土砂流出状況	： 三次谷出口まで(下流のダム貯水域に流出)

傾斜 25° 程度の新第三紀基盤岩の上位に堆積している En-a が崩壊を起こしている。ほとんどの場合、傾斜の緩い尾根部を除く一次谷のすべての斜面（等斉直線斜面を含む）が崩壊している。平面形状が舟状で流域全体として密度の高い樹枝状をなす。新第三紀基盤岩が、斜面長が長く比較的緩い勾配であるために、広い範囲で En-a 以降のテフラが残留し、崩壊規模と崩壊密度が高くなったと考えられる。



(左上)樹枝状に分布する谷頭緩斜面でのテフラの崩壊
(右上)側壁に見られる厚い En-a と Ta-d
(左下)溪流頭部の谷頭のテフラの崩壊
(右下)平滑斜面でのテフラの崩壊

写真 2.2 現地状況

(3) エリア③：エリア②に近いが、崩壊発生がほとんどみられない

崩壊規模と平面形状：小規模、崩壊はほとんど発生していない

崩壊上端の位置：一次谷(V字谷)の谷壁斜面

崩壊の縦横断形状：等斉直線斜面

崩壊したテフラ層：一(表土の崩壊)

テフラの厚さ：一

斜面傾斜：30° 以上

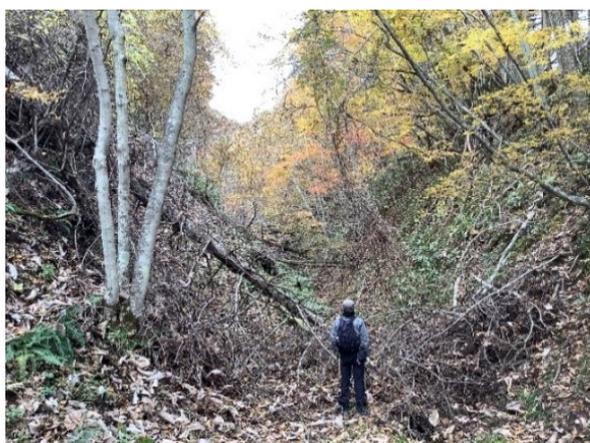
崩壊面の地質：新第三紀基盤岩

溪床状況：崩壊地直下に堆積

土砂流出状況：一次谷溪床まで

ほとんど崩壊が見られないこのエリアでは、新第三紀基盤岩のV字谷が形成され、谷壁上部の緩斜面が認められない。わずかに発生している崩壊は表土の崩壊のみである。

この地域の斜面の傾斜が 30° 以上であり、斜面上部にも谷型斜面がないため、ほぼすべての斜面でテフラが残存していないと推測され、そのためテフラの崩壊は発生していない。



(左)河床幅の狭いV字状の溪流



(右)急な谷壁斜面での小規模な表層崩壊

写真 2.3 現地状況

(4) エリア④：文献上 En-a が厚いが、崩壊発生がほとんどみられない

崩壊規模と平面形状	：小規模、樹枝状～単発
崩壊上端の位置	：一次谷の下部遷急線上部の谷型斜面(0字谷)
崩壊の縦横断形状	：凹形谷型～凹形直線斜面
崩壊したテフラ層	：Ta-d 0.3～0.5m、一部En-a二次堆積物 0.8m
テフラの厚さ	：1.0～2.5m
斜面傾斜	：25～30°
崩壊面の地質	：新第三紀基盤岩およびその崩土、En-a二次堆積物
溪床状況	：一次～二次谷に土砂や流木が堆積
土砂流出状況	：二次谷内に保留

本エリアでは、流域の西部の斜面には崩壊が少なく、東部の斜面では比較的規模の小さい崩壊が認められる。東部の崩壊が起きている箇所は新第三紀基盤岩の遷急線よりも上部の谷頭の緩斜面（25～30°）に堆積しているテフラ（Ta-d 以降）によるものである。西部の崩壊は主に岩盤面の表土の崩壊がみられる。

この地域では、新第三紀基盤岩の下部遷急線より上部にのみテフラ（主として Ta-d 以降、まれに En-a）が残留しており、テフラ層が厚く（1.0m 以上）残存する谷頭（谷型斜面）でのみ崩壊が発生したものと推測される。崩壊面の粘土は、En-a である可能性がある。



(左)道路わきの平滑斜面でのテフラの崩壊

(右)谷頭でのテフラの崩壊。下部に土砂ダム

写真 2.4 現地状況

(5) エリア⑤：文献上 En-a と Ta-d が厚く、崩壊規模・密度が高い

崩壊規模と平面形状：大規模、樹枝状～全面

崩壊上端の位置：一次谷および谷頭付近の上部遷急線直下緩斜面

崩壊の縦横断形状：凹形谷型斜面、等斉直線斜面

崩壊したテフラ層：Ta-d 1.0～2.5m 一部En-a二次堆積物

テフラの厚さ：1.5～2.5m

斜面傾斜：25～30°

崩壊面の地質：新第三紀基盤岩類、En-a二次堆積物

溪床状況：大量の土砂や流木が二次谷～三次谷を埋積し、
一部土砂ダムを形成

土砂流出状況：三次谷まで(下流のダム貯水域に流出)

傾斜 25～30° の緩斜面が広く分布しているため、Ta-d 以降のテフラが広く残留しており、谷型斜面に限らず緩斜面となる尾根部を除いて広く崩壊が発生している。下部遷急線より下部での表土の崩壊を除き、崩壊のほとんどが Ta-d の崩壊である。一部で En-a の二次堆積物の崩壊も認められる。厚く堆積した Ta-d と地形（長い斜面長や低い溪流密度）が崩壊規模・密度に関わっているとみられる。傾斜 20° 以下の緩慢な斜面ではテフラ層が尾根状に残っている。また、溪床から 10～15m に下部遷急線がみられ、傾斜が急であることから、表土の崩壊であると推測される。

この地域では、斜面傾斜が急な下部遷急線以下を除きテフラが広く残存していたため、傾斜が緩い尾根部を除き、ほとんどの斜面が崩壊したと推測される。



(左上) (右上)谷頭緩斜面および緩傾斜の谷壁斜面でのテフラの崩壊
(左下)土砂の崩積 (右下)崩壊地側壁から見えるテフラ層

写真 2.5 現地状況